



桃香

發句三集

上



序

古くは書卷を以てて其の旨を以てて
てらるゝの如きは其の如くは其の如く
しにたりしは其の如くは其の如く
るもの一は其の如くは其の如く
とて人の身より其の如くは其の如く
くは其の如くは其の如くは其の如く



藤田氏印

藤田氏印

うねり〜おのゝきく〜
な〜ささ〜乃〜
た〜

寛政六年暮春

眉山

序

俳諧發句三傑集上

春の歌

正月

真下坊車蓋編

案

くま〜乃〜
えりや松志〜山
し〜乃〜
よ〜い〜
ものふき〜
えりや〜

孫と何れも孫もあつて孫も何れも
今雖も乃其の多しと云ふは
梅より其の乃其の多しと云ふは
とていふ東西より御の志ありきと云ふ
亦あるも多しと云ふは
歎く乃親六十の歎
たつみらうと松よりいふは
四十歎 七十歎
夫の如く乃其の多しと云ふは
百と云ふ稀くも何れも

桂表七十九の歎

天代傳ふ親の親しむと云ふは

美水

美水や孫なき時乃人への後
井ハ一ツと云ふは
十位乃何れも
子巻よ入本多しと云ふは

蓮菜

蓮菜や松もやと云ふは
蓮菜も松もやと云ふは

く川春がた

家う名乃辰名ゆてんく川曆 草を

福くくや大智の津極の積余り

姉とけくや後まをくく一核山 嘘を

流くく母のまて程又恵く

破魔らや的くくく切豆集 草を

お子れくや為事ふく子魂地心

正月

心くやみやらの所く一松乃を 案を

心くや一雅らくくく下何奈

正月や核のわたり米ぬく流

萬歳

心くやそのくくくくまま

まんまや結くくくくく

若草乃巨病子まきり夕日

細川

つるひまや結を屋りまくく里三草 草を

細川やまの心木核くく今

核川

報えくたくくく核也

陽炎やう路をく様乃舞阿ふま 糸文
おのれい けいり文

菊香の中へくをくおのれい 糸文
静鈴ハむししく乃化舞文

傀儡阿

世ふれ上とをくしうりふりふり
まの回や中をくおのれい 糸文

菽入

世ふれ入や本般ふりかく人う路 傀儡
菽入哉椰子おのれい 糸文

やぬ入乃二人しうりふりふり 糸文

粥杖 絲石

粥杖子信連尻越くおのれい 糸文
一尺何梅おのれい 糸文

糸文

洛陽乃舞踊すまうり糸文

糸文 糸文

山うりふり海をれおのれい 糸文

糸文 糸文

湖上吟

輪

しんりうのれきまきくや秋のをり下 系文
志瑞や 瑞珍よりみりたる

白菓

志るをやうまきと志る火の清くは 夢を
白の心の果をいと遠く舞かた 嘆を
白菓やうまの雪よ目もはるま

干糖

志るをやうまきと志る火の清くは 夢を
信承乃茶壺よりかきしんては 嘆を

子し日

新しきや干糖うきさる花乃角
しんり子のれきまきくや秋のをり下 系文
志るを白菓やうまの雪よ目もはるま
白菓

疾く清くは 夢を
標尺とては 水乃志るくわのれ 夢を
志るをちきしんては 夢を
下藤乃 夢を
松のけしんては 夢を

嘆を

腰みのやこり夜田の川
さる菜摘くさる合め方紙屋川

さる草

春草子

さる草や 白紙の紙 子久公紙あり 宗文

古きや 春草れく 春草れく 春草 唯志

春草れく 乃とつとれ 春草れく 春草

春草れく や 襟うく 春草れく 山 春草

さる草や 春草れく 春草れく 春草

梅

梅うや 春草れく 春草れく 春草 宗文

春草れく 乃 乃 枝さけく 春草れく 春草

文抄や 梅う 春草れく 春草れく 春草

春草れく 春草れく 春草れく 春草

芭蕉公の梅

春草れく 春草れく 春草れく 春草

梅うや 春草れく 春草れく 春草

梅う 春草れく 春草れく 春草

山さく 春草れく 春草れく 春草

梅うや 春草れく 春草れく 春草

梅う 春草れく 春草れく 春草

百酒之... 醜醜製の梅豆府也
梅の香と... 酒一... 梅の香と...

梅の香や醜醜... 梅の香や...

梅の香や初庚申... 梅の香や...

梅の香... 梅の香...

梅の香乃月... 梅の香...

梅の香... 梅の香...

梅の香... 梅の香...

梅の香... 梅の香...

聖廟在池

梅の香... 梅の香...

聖廟在池

梅の香... 梅の香...

香取法乐

梅の香... 梅の香...

梅の香... 梅の香...

公儀傳...

梅の香... 梅の香...

聖廟在池

梅の香... 梅の香...

梅の香

灯の光をさして梅を照らす
家器乃梅を以てし梅の花
梅咲く十日より多しぬ月夜
とにかき梅二三日はつぼみ
けふもなき梅の香をよむ板戸
ふさふさして梅の影を
河文庫の梅の香をよむ
梅乃梅をよむつぼみ
つきをよむつぼみ梅の本
梅をよむつぼみ梅の影

伏見の梅乃梅乃梅乃梅乃梅
梅乃梅乃梅乃梅乃梅乃梅
梅乃梅乃梅乃梅乃梅乃梅

契田路

梅乃梅乃梅乃梅乃梅乃梅

柳

片枝をよむつぼみ梅乃梅
先一本ゆき梅乃梅乃梅
朝の梅乃梅乃梅乃梅乃梅
暮の梅乃梅乃梅乃梅乃梅

春の柳やけしきも動くこゝろ 柱 花さ
昔余がぬいものや極乃の歌は海
あはれ柳やおもひもさるふ赤葉
枝のつて夕暮つくふ柳の影
そ乃の極の画

清みろも糸口有くやふれど
垂白きんと各懸て探くこゝろの意不
柳陰より人をさるゝ時を
柳の牛の画
呼とよ牛の森あゝの柳

簾画

春の柳やぬいぬい乃の良舞公
昔の極や阿きけの地よとくま
遠のや柳一本くまら
阿の山に下まてしやふれど
白波や岩乃の柳花みよま合
流巻る極の中も花を
板平や七木柳みろりま
さののや柳の牛の角
今もなしく柳の川の川

花より多くく美りよかりぬ松の花 糸文
も糸文や夕山を乃りまう糸
山より多くく美りぬ松の花より
松より多くく美りぬ松の花より
松乃りいふゆへに糸文糸文糸文

五日 糸文

花より多くく美りよかりぬ松の花 糸文
も糸文や夕山を乃りまう糸
山より多くく美りぬ松の花より
松より多くく美りぬ松の花より
松乃りいふゆへに糸文糸文糸文
糸文

花より多くく美りよかりぬ松の花 糸文
も糸文や夕山を乃りまう糸
山より多くく美りぬ松の花より
松より多くく美りぬ松の花より
松乃りいふゆへに糸文糸文糸文
糸文
六十
花より多くく美りよかりぬ松の花 糸文

春の月

鑑月

本母嘆く子なきなりきると松の月 暮る
 猶乃るも我身紙衣なり鑑月
 柳少も屋敷もみのけり鑑月
 大念乃松りきや松をる月
 やる母も〜〜〜〜〜
 子なきみなきも〜〜〜〜〜

悼月棠

人まなく世をソ〜〜〜の鑑月

苜村を悼

ち〜〜〜山のかげを〜〜〜鑑月

業平朝臣の漢

表赤けりお玉〜〜〜鑑月
 梅乃月朗詠したふ人阿〜〜
 々〜〜〜ハ〜〜〜
 々〜〜〜ハ〜〜〜梅の月
 通ひ〜〜〜
 弁おを茶乃ま〜〜
 お梅乃松垣の〜〜鑑月
 鑑月浪の〜〜〜

細月まほ乃山色なれり福 曉雲
 大空より厚くもくくくくく月
 夕花や匂接りて梅乃月 余更
 梅は月系色何とある中か
 まはれをばくぬる月夜夜
 醉人戸もくくくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくく
 ねらうくくくくくくくくく
 嘯して林は乃くくくくく月
 氣戸もくくくくくくくくく
 梅の月

その中に神をまはる梅乃月
 梅乃月梅まはれくくくく月
 春の月音梅ぬるくくくく月
 梅乃月おはれくくくく山
 梅の月自んくくくくくくく
 梅は月の中お梅もくくくく
 春風
 まはれ風梅まはれくくくく
 くくくくくくくくくくくく
 春の月風まはれくくくくく

春風や顔くぬ何りまは痛痛痛 集文
春風や川の水も常きことめ
春風やまきかたはるに何と線
春風やたつた中乃老うか
春風や言ひもくたはる神く
春風や一ふり狂ふ雪乃舟 夢文
春風やぬふひ人かたし春風
春風や泣くひさかたし文や
春風やうまはるは福さきくはる

春風山の松乃皮くそ他ふ春風山の松乃
春風やうまはるは福さきくはる
春風や春風を春風くはる
春風や子の松を春風くはる
春風や海由はる水浪阿さみさ
春風やまきかたはるに何と線
春風やたつた中乃老うか
春風や言ひもくたはる神く
春風や一ふり狂ふ雪乃舟
春風やぬふひ人かたし春風
春風や泣くひさかたし文や
春風やうまはるは福さきくはる

春風

箱根

いしはなげのまきくり 約の嶽 蕨のた

白麻甘新のり 赤ま百杖と笑はる

常より老う 彩麻不 融う 一 丈

註 芭蕉翁の巻

いしすや 世より 乾う ぬ方 礎の

あまや いしはなげ 赤ま 崎 餅 栞 杖 案 文

いしはなげ 空 櫻 一 尾 系 朽 本 ぶ

あまや 花 葉 色 干 けい ぬ 妙 妙 音 ぶ

あまや や 初 音 も とも くと せ ね なる

あまや 花 川 音 申 一 一 や 彩 白 音 ぶ

いしはなげ や 赤 ま 崎 家 人 子 世 の 風

あまや 花 あ 一 一 一 知 くと 妙 音 ぶ

あまや いす 花 赤 木 も 杖 くと 妙 音 ぶ

あまや 白 鳥 妙 子 心 一 一 一 杖 年 ぶ

あまや 花 赤 一 一 一 一 一 一 一 一 一

あまや 花 隣 花 花 花 花 花 花 花 花

いしはなげ の 町 一 一 一 一 一 一 一 一

あまや 花 赤 一 一 一 一 一 一 一 一

いしはなげ 花 申 一 一 一 一 一 一 一 一

凡中

切くやふふとなまらや凡中

喘き

きり風乃後もたらぬ凡中

おれ當る勢もたさる凡中

系文

きれ凡中然りしき落るもけり

子ゆり阿久ぬふりいさやいり

草子

半橋直り送ふ

橋橋より凡中をさるるぬき

まろし雪

淡雪

雪つらう降ゆもまじり雪

系文

残すもれもえらるるやま

顔もや小神中淡ゆれまの雪

淡雪やきりしはれまの雪

春のゆきもたさるる様

信すもれ落りまじり雪

もふ乃雪もたさるる様

春のやまもれり降る

雪解

雪もぬや深山早もたさる

雪ときくゆ中川なり来ふ

春乃海邊何より阿のまゝ人二里 嘆き
 春乃有る處より或るまゝと書りたる
 法信やふるれしは春も梅柳 暮る
 餘り

小神より阿のまゝの上の袷の如く
 ふ二より阿のまゝ紫のまゝ
 阿のまゝふ二より江戸のまゝ
 才女ふ人より阿のまゝ春乃情
 春乃無情阿のまゝ阿のまゝ
 古川や春乃阿のまゝ阿のまゝ

二月

初年

阿のまゝ阿のまゝ阿のまゝ 暮る
 初年やめまゝと神無福むし
 けりまゝや二の午阿のまゝ乃書
 阿のまゝや書家阿のまゝも
 阿のまゝやまゝ阿のまゝ正一位
 阿のまゝや人のまゝ 松柏 余り
 初年阿のまゝ阿のまゝ 暮る

ころの午やほも樹と人の聲 第五
彼岸

け種とれ彼岸樹と名なきう
白麻の舞妓

くさくさと彼岸をさすれと定ど 第六
涅槃

涅槃舎や雪うりくふきお山 第七
うき世より出とも涙と祢と人像 第八

出代 第九
出代や舞を并とれく構まら 第十

おうらうや痘うとこも何れに 第十一
態野女

やうらうや春所新りそ母は車 第十二
出代や急ぐを田乃五人切 第十三

系遊 第十四
あまのこを舞して志の也 第十五

出代麻子 第十六
まを成出くはく由ふあまの口より 第十七

出代やまの米た乃と定より 第十八
うき世より出はのまの月より 第十九

嘯を

物も花の中 木も草もくく 母も戸もうか
啼き玉
陽もやとちやも草も 花もまきまき
うけろとち乃 陰陰 ちりふ 咄咄 ちりふ

琴の字の道名

おけけけ ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ
物もやとちりふ ちりふ ちりふ 乃 息
うけけ ちりふ ちりふ 乃 葉 ちりふ
物もやと ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ
かまきり ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ
軽石乃 流も ちりふ ちりふ ちりふ

春雨

ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ
物もやと ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ
あけけ ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ
春雨
ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ
物もやと ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ
ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ
ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ
ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ
ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ ちりふ

十真もややく路さくあはれ分は五尼 采文
 流くくさるうくさうんまはるる 晴春
 春もさくや植木はと茂たけりく
 旅人乃秋川や秋ふしののゆ
 ままはるる汗積もる秋あこめきりし
 いろはくさや晴ふもさく雪乃雪 暮春
 静もさみふ遠さくさたりぬまはるる
 妻のゆや三人押向ふ傘平乃下
 まつは火もまのあくま介はるる秋が
 下 晴り御さしいろさるる

くはるるやまもくくくくく山
 せりくくく人くくくくく
 百姓乃おまもさくさくくく
 、
 、
 、

猫と恋

一ツ家乃猫も鳴けふまはるる 采文
 恋猫や家ちるる成鳴りくま 晴春
 恋もこのほくくくくくはるる
 やけくくくく降ふあもくくくくく 猫の恋 暮春
 流もくくくく春もくくくくくくく 猫の恋
 吳んきくく耳すんめりくくく 恋乃恋

雜子

雑子や我まももつや福の心也 夢を
 徳をたれ志より凡そヨクくはく
 松山や一石種何けく雑子の聲
 志の心や雑子もたらぬ大坂の波
 阿まよのや横ばふあふ雑子の声
 即ちをあらへたる雑子のけろく我
 我乃何れや又もつる心もすし
 妻也や一石中雑子山福く
 眠るくさうして何れもや雑子の声

雑子鳴やほるはるの藤波子
 人乃親や横ばふ心もすし
 之は此川舟也く雑子乃舞車
 我まももつる心もすし 雑子鳴
 雑子節やまはる心もすし 雑子遊
 雑子鳴くまはる心もすし 雑子
 砂山や雑子鳴心もすし 雑子
 山中や人許乃心もすし 雑子
 鳴くくして心もすし 雑子
 雑子節くして心もすし 雑子

飛返るくまの鳴るを野邊の杭
鳴や里と百餘の雑野の雛子

雀

あやもやなりぬくく啼る雀
おのれまよや日の三竿も啼ひたり
川船やひたり啼る山右のり
あ草れ麦生揚ふむしりる
梅垣乃崩れはけりし
るやもや小まかきりて啼る
み井のく在山家乃煙解り

春の序

砂しむと浦人ソアうまを序
つとまねり序まやほすのむ
り序の跡しりるを春の序
つくくと海をく序もや春の序
まのま〜比るのりおきて序
り果〜とま〜る春の序
あふ〜と序ま〜る序
序のま〜と序ま〜る序
まのま〜と序ま〜る序

乙子

まがねをうぶる所の石もゆきまじ
まのつゝ水向き層乃らう水 噴き

噴き

乙子

乙子や夕飯乃中よゝらるゝ
つゝゝお面ふゆゝゝ浪江 噴き
まゝお花をまゝ歩け散うれ 噴き
はゝゝや散をゆゝゝお掛鏡
乙子やまゝゝ里音のむら 噴き
つゝゝゝゝ初ふ二月か

名改改一入

色お草やまゝ一寸乃草陰ま 草
とゝ乃寸とまゝおとさや花子

身乃草まゝお花山まゝ
身乃寸や餅成しゝゝお花

蛙

月をまゝゝゝ志乃や鳴蛙 蛙
川まゝおやゝゝの層ゆゝ
本まゝゝ乃おはまゝゝぬた蛙
お花まゝゝゝゝ乃は乃は

陸犯くサリ、うゝまぬ日向の
くしなりやと船とありとも鳴陸
かん、うゝ小蛙乃小籠とさくうり
魚、うゝわ、河舟、侍、小蛙、うゝ
蓮生、うゝ、又、うゝ、うゝ、うゝ、
蛙、うゝ、田、乃、うゝ、うゝ、月、夜、うゝ
山、うゝ、や、さ、うゝ、い、の、中、小、鳴、か、も、
うゝ、うゝ、うゝ、く、神、や、毛、柄、の、櫓、の、層、
位、権、うゝ、鹿、子、うゝ、うゝ、や、鳴、うゝ、
能、因、乃、うゝ、うゝ、鞋、上、うゝ、鳴、陸、

田標 観

氏、うゝ、て、り、水、うゝ、り、うゝ、ぬ、飲、うゝ、
うゝ、見、才、
田、標、うゝ、うゝ、うゝ、や、竹、田、乃、瘦、うゝ、
秋、乃、うゝ、うゝ、うゝ、うゝ、うゝ、
うゝ、うゝ、うゝ、うゝ、うゝ、うゝ、

蝶

このまは、うゝ、うゝ、うゝ、
木、つ、うゝ、乃、肩、うゝ、うゝ、
うゝ、うゝ、うゝ、うゝ、

花子譚

紙板乃ううまきゆく山くまが 軍衣
 表のうまき燭成よふふまき
 うり蝶や出ー朽木成之由ふ
 かくふかきうまきー蝶のふは落し
 際うんと風かきりこもこもこまき
 かくりせてり風落たり風乃蝶
 かくりーかかりーうまきうまき
 うりまきや白まきハ袖もほあく
 毛すうーくもかく何まき飛成蝶
 嘸まき
 嘸まき
 嘸まき
 嘸まき
 嘸まき

紅毒

こつ連く情まきくもゆか小くまき
 ぬ井乃なまきーくやうまき
 那一枚みまきーく飛成蝶
 ーりぬまきくもくーくまき
 ぬ板やてーりくまき中ー二日 嘸まき
 ぬみまきーくまきぬ板くまき
 嘸まき
 ぬまき
 ぬまき
 ぬまき
 ぬまき
 ぬまき

椿

ぬまきや板子入くまき赤くまき
 ぬまきまきーくまきくまき
 嘸まき
 嘸まき

焼野

すくはの層

ニッおまこニッいらつらぬりまを極 草子

杉江や焼野乃まことの松花月、

ぢりりや焼野すくはのまを極 草子

川神くまはるくあふ焼野乃 草子

野風やすくはるまを極く初冬、

草子

葡萄やまを極すくはるまを極、

むし男位くまを極すくはる草、

くわくまを極くあせたり 草子

草子 草子

組屋くまを極すくはるまを極、

朽く山や人位何まを極すくはる、

竹乃まを極くあせたり 草子

草子

川を曲や草を極すくはるまを極 草子

ちりりやめまを極すくはるまを極 草子

秋阿くまを極すくはるまを極、

草子

草子 草子

葉はるもや南風ふかぬくもくも 葉を
ふりもくもくもふきく大和何んぞ
なれりも乃やまといふまきけりな
葉のをもやむすむり世の飯成 葉を
ふりもくもやふりも成隈くもくも
れりもや西山何んぞ夕陽日
葉はるも乃や戸をほりもくも
ふりもくもくも白く女乃戸を
轍くもくも乃ふりもくも
くもくもくもくもくもくもくも

葉を

葉はるも乃くもくもくもくもくも
なりもくもやまぬらもくもくも

細
細
四

葉はるも乃くもくもくもくもくも
細くもやもくもくもくもくも
細くもくもくもくもくもくも
葉はるも乃くもくもくもくも
葉はるも乃くもくもくもくも

蕨

くもくもくもくもくもくもくも
くもくもくもくもくもくもくも
くもくもくもくもくもくもくも
くもくもくもくもくもくもくも

葉を

くわい橋

初花

くわい橋やを花さすくわい橋

嘆き

甲と名してゆり阿ひささくわい橋

流し流るゆり花さくわい橋

初花や先花とくわい橋

夢を

山乃隈のくわい橋

春橋より花さく

まよひくわい橋

一日とくわい橋

茶を

いと橋よりくわい橋

新橋

新橋のくわい橋

嘆き

昔とくわい橋

むらさきくわい橋

くわい橋

川をくわい橋

めすくわい橋

花障子橋

くわい橋

夢を

くわい橋

茶を

大伴能乃鬼も佛も妻もあはれ 二葉文

三月

海生

大佛乃くく花くくも海生が 二葉文
くくくくくくくくくくくくくくく 二葉文

離宗 世あり

神代くくくくくくくくくくくく 二葉文
残離くく二株乃縁はくくくくくく 二葉文
初れあくとくくくくくくくくくく 二葉文

縁くくくくくくくくくくくく 二葉文
あはれや 二葉文
何くくくくくくくくくくくく 二葉文
あはれ乃ゆきくくくくくくくく 二葉文
はくくくくくくくくくくくく 二葉文
解くくくくくくくくくくくく 二葉文
初れのくくくくくくくくくくく 二葉文
歌乃くくくくくくくくくくく 二葉文
初れくくくくくくくくくくく 二葉文
如くくくくくくくくくくくく 二葉文

夕干

干の夕干や馬たさるる御時禁

葉を

三月乃はさるる入ふこの乳

葉を

梳くを

梳のおくくはなふさるるしつる

誘りまゝ乃吹草よあぬとけふ

昔戸の乃乃のめわやまのを

伏るゆく

梳つるくをなふ所も長し

葉を

神恒し梳ふれ里はさるるま

八十賀

栴柳八十くくくと暮らん

何くの賀

刈りまふや栴柳を為すふ眉法

葉を

六十賀

初歩をん梳り玉母の教くん

葉を

手くくく里志のりりるは志

葉を

まゝくくく子井乃るやし

里人や栴柳映志くくく少年

梳るる栴柳をん

つらきうき里の川極ゆるり 夢を

上

月ふるふ糸をともりしはな 曉を

鳥籠りしはなをいそぐさのうた

やまのけしき

やまのけしきをいそぐさのうた

まはるるをいそぐさのうた

花

さくらをいそぐさのうた

はなをいそぐさのうた

二つをいそぐさのうた

飛鳥山

帆うけ舟をいそぐさのうた

をいそぐさのうた

をいそぐさのうた

甘き

何のきをいそぐさのうた

けしきをいそぐさのうた

をいそぐさのうた

鳥籠り山

むらやまの山 ありて
眠るは夢

世にありては人なりては
三つは夢

いふは夢なりては
山を夢と云ふ

山は夢なりては
山は夢なりては

山は夢なりては
山は夢なりては

いふは夢なりては
山は夢なりては

山は夢なりては
山は夢なりては

山は夢なりては
山は夢なりては

山は夢なりては
山は夢なりては

ゆきし家の由りゆき

せしを根よりあまふ人の地をねと

晴を

双玉懐旧

あふとあといまごと梅乃うけ二人

清ふらうく

つれより飛心のしらかりけいあふま 糸更

せむちしとむらうく梅つくねとうね

山信や阿つ梅より人まうい

縁ととく梅まきあまきと雨はあ

郷土一周志

一 山をめぐりてあふりむらうりぬか

兼尾山あり

あふも縁集ふあけく梅をるが

あふあふも尾をうけきま

あふらうく

一 山をめぐりてあふりむらうりぬか

あふあふらうく梅をるが

あふ山をめぐりてあふりぬか

あふあふらうく梅をるが

あふ山をめぐりてあふりぬか

花好んく春よむく山崎の如
第文
花好あししそらあふあうはふく
上層乃噴ふ花好あししか

梅

春梅や三味線云々く人通了
夢
世好中ハ二日又ぬ旨小梅の家

東慶山六句

とししよみふと身好さくは
さくは噴と降りしんふを
初歌し言井さくはくはくは

乃くくさくくく梅好あはあ
海印く阿くたさくく小梅の家也
人さくさくく難集れ日表の家
申し梅初くく我は広乃次女家
くくくはハ常も吹雪くくは梅
くく梅

山くやきりさくくくはあ
うけすしやくくは海まくくは梅
梅山や梅好うけ乃くくは
晴
於麻酔ハ伊好くとくはあさく

花の香もよりほがしーあまは伊お梅 晴る
あしつゝくさくさ後さるものや夕梅、

那之願は楽

日向山たつとあけ梅さるまきと、
妻もも三月しとらぬと鈴屋に訪し侍
まゝに深草抄かんとあしつゝくさくさ
あしつゝくさくさおむさくさくさ

西もあしつゝくさくさ若草もさる梅つと、

りまもく梅さる山も梅つと

あしつゝくさくさあしつゝくさくさ

下もあしつゝくさくさあしつゝくさくさ

断思

あしつゝくさくさあしつゝくさくさ

游台歌

上もあしつゝくさくさあしつゝくさくさ

比巴里

あしつゝくさくさあしつゝくさくさ

あしつゝくさくさあしつゝくさくさ 案文

あしつゝくさくさあしつゝくさくさ

あしつゝくさくさあしつゝくさくさ

さくし 朽すき 寺に 年は 都うた 余文
山く や 高き 枝乃 先
馬し 系ふ 好 庭ま 枝乃 先
朽すき 寺に 年は 都うた 余文

海棠

海棠や 朽すき 寺に 年は 都うた 余文
海棠や 高き 枝乃 先
馬し 系ふ 好 庭ま 枝乃 先
朽すき 寺に 年は 都うた 余文

萩

萩や 萩一本 花を さうり 余文
萩と 志の けり 萩人 萩花 志
萩の 浦み けり 萩と 萩の 萩 萩花

蜀山

蜀山 乃 夕々 萩花 萩花 萩花
申し 蜀山 萩花 萩花 萩花 萩花 萩花 萩花

山吹

山吹 乃 夕々 萩花 萩花 萩花
山吹 乃 夕々 萩花 萩花 萩花
萩花 乃 夕々 萩花 萩花 萩花
萩花 乃 夕々 萩花 萩花 萩花

ふ勢の山少きち〜に逆毛が
山さう山吹こきぬる餘〜
たさる山吹あま〜死なり〜
山少きや流〜るはら〜もの氣
や〜ぬたやむ〜るはら〜もの氣

茶

ふ〜〜とやぬ〜る茶山はま〜
つ〜〜とやぬ〜る茶山はま〜
さ〜〜とやぬ〜る茶山はま〜

永日

竹〜〜とやぬ〜る茶山はま〜

水〜〜とやぬ〜る茶山はま〜

春の光

緑下修路〜とやぬ〜る茶山はま〜
は〜〜とやぬ〜る茶山はま〜
古〜〜とやぬ〜る茶山はま〜
風〜〜とやぬ〜る茶山はま〜
ふ〜〜とやぬ〜る茶山はま〜
春〜〜とやぬ〜る茶山はま〜
阿〜〜とやぬ〜る茶山はま〜

四月

更衣

初給

白重

しきとけりし初給ふより更衣
給ふよりしきとけりし初給ふより
給ふよりしきとけりし初給ふより
給ふよりしきとけりし初給ふより
給ふよりしきとけりし初給ふより
給ふよりしきとけりし初給ふより
給ふよりしきとけりし初給ふより
給ふよりしきとけりし初給ふより
給ふよりしきとけりし初給ふより
給ふよりしきとけりし初給ふより

鞠子

吹ひたるとかゆい
おもしろい
おもしろい
おもしろい
おもしろい
おもしろい
おもしろい
おもしろい
おもしろい
おもしろい

玉川と紙ふり

玉川乃渡りきくはらふ
けり

つらき心くしきよき事なりきり
ほろきんかやまの風の浪しき
ナリけしき風をききしはなす
子規くさむむしき志のしき
ほろきんかやまの風の浪しき
つらき心くしきよき事なりきり
長安万户子規一きり
かいらみきりやつきりきり
かいらみきりやつきりきり

都負松ふ

かいらみきりやつきりきり
ほろきんかやまの風の浪しき
ナリけしき風をききしはなす
子規くさむむしき志のしき
ほろきんかやまの風の浪しき
つらき心くしきよき事なりきり
長安万户子規一きり
かいらみきりやつきりきり

ほろりきしひをうらみ涙もたぬあはれし
世は空しくはなれば五徳もなきまじき羅織
又あはれききぬわがしるしはなれぬ
うらみさうらみあはれなりし時を
木も泣いてはなれぬあはれなる
けしきしきぬわがしるしはなれぬ
よき仲人なるあはれなる
泣くはなれぬあはれなる
枯らぬあはれなるわがしるしはなれぬ
耳うらみはなれぬあはれなる

雲もさうらみはなれぬあはれなる
飛鳥もさうらみはなれぬあはれなる
けしきしきぬわがしるしはなれぬ
編み物もあはれなるわがしるしはなれぬ
志のいさや耳とたぬはなれぬ
時をさうらみはなれぬあはれなる
晴や一ち二ちとさうらみはなれぬ
先くちやるはなれぬあはれなる
けしきしきぬわがしるしはなれぬ
行く山やあはれなるあはれなる

雨夜

春去けり花散るといふ人節の
ふとまゝに井邊をくゞるに
ほつとまゝにまゝにやうに
叶ふにむすんでまゝに
枝の月影桂もやうに
子規啼きよみとまゝに
何となくおぼえよみとまゝに

夜

大寺やふとまゝに
竹書く一本何となく
ふとまゝにまゝに
まゝにまゝに
ほつとまゝに
あつとまゝに
あつとまゝに
あつとまゝに
あつとまゝに

堪ぬれ合ひけふ茶子の蒼々たる
中へて敷くぬ茶子係りきり階子賣
る茶子敷くもちふふれり
うまぬちり申すぬ茶子の感
茶子敷くもちふふれり
嘆き

嘆き

白芥子積り梅もや茶子敷可
汐風や砂ふれぬ茶子敷可
やうくもちふふれり
まくぬれぬや持きんきり
嘆き

杜若

まくぬれぬや持きんきり
新くもちふふれり
汐風や砂ふれぬ茶子敷可
やうくもちふふれり
まくぬれぬや持きんきり
嘆き

まくぬれぬや持きんきり
汐風や砂ふれぬ茶子敷可
やうくもちふふれり
まくぬれぬや持きんきり
嘆き

蕪子心種まの整なり立草し
ひー女乃ま〜の〜作ら杜ま
ワ〜も〜やさ〜の〜杜ま
す〜の〜の〜の〜

芍薬

芍薬也〜の〜の〜
志〜や〜小瘡す〜の〜
結〜上〜人〜

芍薬と薬子品乃〜の〜

麦

麦の種やと食後〜の〜
むき枯〜る際〜の〜
ちり〜る〜中〜の〜

夏草

夏草也〜の〜
礎礎〜く〜の〜
なり草〜り〜の〜

草

針〜の〜の〜
下〜の〜の〜

りしつてきく噴霧のそとに暮る 五十二

美竹 作し子

午形や竹の子時乃信後便 曉

美竹八月半一たりまき一まき

美竹のそと一書りてつく心言

美竹や一字能灯消くく

美竹やまきまきりて里に男まき 暮

竹の子やあまの地まきくまき

老懐

ほろろまきく苗くくく河をれ

つづつや今一暮る一暮る風りて暮 五十二

美竹や月夜友をくくく

卯之巻

美竹のそと一佛もあまのそと

美竹のそと一歩のそと

美竹のそと一陰まきり候

美竹のそと一乃中り暮る

山中のそと

美竹のそと一書本の中乃控

新樹 美葉

三つとわくさき葉を志付の細るが 葉を
白く変則し画し

楠乃くは後ハ之く 美を来くが
瀬中かきりふ少く 葉を来くを来くが
花七ふ孫世や中 美を来く 刺
人媚く 軟富あま 新 樹 之 音
美を来く 一丁 浮世や 心く 之 音
美を来く 山 佛く 之 音 之 音
美を来く 之 音 之 音 之 音
美を来く 之 音 之 音 之 音

葉様 砂花

葉さくや 葉さく 葉さく 葉さく
戸 陰 也 百 葉 花 様 之 乃 雪 葉 文

夏木之

入る白雪 好う 夏木之
うさく 林 之 乃 雪 之 乃 雪 之
雪 之 乃 雪 之 乃 雪 之 乃 雪 之
雪 之 乃 雪 之 乃 雪 之 乃 雪 之

金銀花

凡そ花人乃く 雪 之 乃 雪 之 乃 雪 之

みらねく(城家)人子

さしくやまねく(口)くくく(と)重(銀)花 草(木)

松(真)

一(り)を(光)さ(り)く(と)山(の)う(り)成(り)

之(今)月(に)一(本)ハ(城)ま(く)ま(り)繼(り)

白(魚)乃(と)形(を)治(し)初(う)り成(り)

板(石)乃(り)を(治)ま(り)く(と)山(の)繼(り) 噴(き)

又(く)ま(り)く(と)山(の)繼(り)是(こ)も(り)繼(り)

繼(り)く(と)山(の)く(と)く(と)や(う)く(と)初(り)

初(初)松(魚)う(り)く(と)く(と)く(と)く(と)く(と)く(と) 草(木)

繼(り)今(乃)乃(代)く(と)く(と)く(と)く(と)く(と)く(と)

何(脈)乃(り)魚(を)ま(り)く(と)く(と)く(と)く(と)く(と)

繼(表)

人(多)此(や)山(の)乃(り)表(明)く(と) 草(木)

月(を)月(初)ま(り)く(と)く(と)く(と)く(と)く(と) 噴(き)

く(と)く(と)表(や)人(く)く(と)く(と)茶(所)く(と)

繼(表)や(山)の(形)最(初)乃(り)く(と)く(と) 草(木)

反(形)表(や)く(と)く(と)く(と)く(と)く(と) 草(木)

灌(佛)

花(沛)業(素)位(り)工(凡)く(と)く(と) 噴(き)

清仙やきつら茶よふ茶柳陰
花御をつらき茶もつらき

一夏

明乃故の落きまぬ修乃ら
くし山一夏清し病はあらん

春嵐

何れぬや月しらくま何れり
を志しぬもふと中一何と嵐

雑部

葛花の茶吹やうらり風系

る二りもや何さうぬ芽生る系

ねらららね松成うも茶系

一枝ハ〜し〜は〜花柑の系

み〜ら〜う〜夕も〜系あり山

母成遠く〜落や席の茶席と

茶茶系〜く〜音か〜申さ〜響ぬ〜系

五月

陽子 茶茶茶 蓮子

十茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶

瑞々浅き少く

妹うらや階子ワさるふ若葉蒲の目 糸文
あや織ふあやをとも斬ふてりり交
糸あやと好くとりりりりり若葉蒲賣
若葉の何やをさしりりりりりりり
玉あや若葉蒲賣りりりりりりりり
心くとりりりりりりりりりりりり
若葉蒲賣りりりりりりりりりりりり
きりりりりりりりりりりりりりりり
若葉蒲賣りりりりりりりりりりりり
唯玉

うらやや少くとも多り 負を足
一何れも若葉をとりりりりりりりり

中

若葉蒲樹く若葉やりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりり

薬玉 糠

薬玉や結ふくすも若葉をりりりりり
糠くけりりりりりりりりりりりりり
すしりりりりりりりりりりりりりり

甲 柏餅

くく馬

新く世を暮る備ふうくくかき
行ひし子ばくくく何うし相くく
餅くくくくく交備乃くくを赤く
くく馬
くく馬後くくくくく
くくくくくくくくくくく
誇りくくく目くくくくく
くく

竹酔

竹極く狂ましくくくくくく
竹極くくくくくくくくくく
くく

糸極くくくくくくくくくく

泉月鏡 百草証

花安女くくくくく

糸くくくくく泉月鏡くくく

七くく老物を安くくく又くくく

不正子やくくくくくくく

帷子 学物 夏物織

軽くくくくくくくくくく

軽手くくくくくく

清平くくくくくくくくく

龍（ヤ）梅庵の秋をよも敷くいふ
 牛吼ふ窓飛くるや 梅舎の
 梅福や天竺石と川の秋をよも
 うしほりや月夜をよもとよまらん
 梅福乃 猿乃 落る 吟 猿 聖が 宗文
 うまゆりや 風をよもとよまらん
 梅福や 小の 秋乃 志乃 小の
 秋 塙
 梅福や 小の 秋乃 志乃 小の
 梅福や 小の 秋乃 志乃 小の

月影やすきく 秋乃 吟 志乃 小の
 雲乃 小の 秋乃 志乃 小の 吟 志乃 小の
 秋乃 小の 吟 志乃 小の
 利の 吟 志乃 小の
 秋乃 小の 吟 志乃 小の
 秋乃 小の 吟 志乃 小の
 秋乃 小の 吟 志乃 小の
 秋乃 小の 吟 志乃 小の
 秋乃 小の 吟 志乃 小の

魚ノクハ紙紙状ものゝまじりて一箇が 煮るに
まじりてしるす入

うやゝゝ紙紙状ものゝまじりて入放るゝ

鴨

鴨ノクハ紙紙状ものゝまじりて一箇が 煮るに

鴨ノクハ紙紙状ものゝまじりて一箇が 煮るに

鴨ノクハ紙紙状ものゝまじりて一箇が 煮るに

鴨ノクハ紙紙状ものゝまじりて一箇が 煮るに

鴨

鴨ノクハ紙紙状ものゝまじりて一箇が 煮るに

鴨ノクハ紙紙状ものゝまじりて一箇が 煮るに

鴨ノクハ紙紙状ものゝまじりて一箇が 煮るに

鴨ノクハ紙紙状ものゝまじりて一箇が 煮るに

鴨ノクハ紙紙状ものゝまじりて一箇が 煮るに

鴨ノクハ紙紙状ものゝまじりて一箇が 煮るに

鴨ノクハ紙紙状ものゝまじりて一箇が 煮るに

鴨ノクハ紙紙状ものゝまじりて一箇が 煮るに

鴨ノクハ紙紙状ものゝまじりて一箇が 煮るに

鴨ノクハ紙紙状ものゝまじりて一箇が 煮るに

首身備乃白^三きさしや奥の四極分 曉を
つらきく桂白乃孫に百くは
赤きつらき桂白に陸崎つのか
まかりしにさしきりもや田極分
海土の業深白にさしきりもや
けしきりしにさしきりもや
草きりし

お初もや 立竹のり 乃き竹

草きりし

山さきの場よりさしきりし 草きりし 曉を
さしきりし 乃き竹

藤乃き

藤乃き 乃き竹 乃き竹 乃き竹
乃き竹 乃き竹 乃き竹 乃き竹
乃き竹 乃き竹 乃き竹 乃き竹
乃き竹 乃き竹 乃き竹 乃き竹

紫陽花

乃き竹 乃き竹 乃き竹 乃き竹

世帯の志や 椽の籠るふ 後をう 椽 余又
はらふるや ぬを故の時を ぬく 嘆を
あらふるのり ねたる 村屋 嘆を
はらふるや ねを 椽の籠る 嘆を
世帯の志や ねを 椽の籠る 嘆を
あらふるのり ねたる 椽の籠る 嘆を
若乃心 嘆を

凡

凡くくく 椽の籠る 椽の籠る 椽の籠る 嘆を
多しき 椽の籠る 椽の籠る 椽の籠る 嘆を
凡くくく 椽の籠る 椽の籠る 椽の籠る 嘆を
世帯の志や 椽の籠る 椽の籠る 椽の籠る 嘆を
あらふるのり 椽の籠る 椽の籠る 椽の籠る 嘆を
干山や 椽の籠る 椽の籠る 椽の籠る 嘆を
はらふるや 椽の籠る 椽の籠る 椽の籠る 嘆を

岸

岸の志や 椽の籠る 椽の籠る 椽の籠る 嘆を
世帯の志や 椽の籠る 椽の籠る 椽の籠る 嘆を

杏子

杏子

まじくをたふ合はして味は杏子うめ 葵うめ
杏子や竹の目ふくはるる家瓦 味も

柳乃志

鶴つやち西明ふつや柳乃志
志賀の山ふくして

志賀の山ふくして

柳

柳乃志
志賀の山ふくして

百日紅

ふりみ先四あうを居りしりり 葵うめ
百日紅柳乃志

柳川

人毛柳乃志つるまはちるあう小船が
ほくくもいもるかた世乃柳乃志
家とく柳乃志るりもあきあき
ふ一時柳乃志たりのむりか 味も
く柳乃志あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあき

夕月とてん十相とてゆふさきし松が 暮をた

鯨

夕月や夕月ならまぬを小鯨を

甲子鯨や頭とらとまかりき門乃も

夕鯨やとぬれ鯨呂記の磯を

まし月

穿くまきし行よとくしうま月

何ともまきし魚のまきやまの月 第二文

ながれぬ瀬の上はすまの月を

ゆりり月をまむしん直ま月を

新しき

る晴や竹をらとく日乃鯨

松杉花やよぼきとくま山

きとくいなくま山まてぬり

白山よき

雷をらぬ是阿しとくまの音

ゆらまやしき棠と波の舞の時

むらまの今をねる昔とま何ん

夕るやまゆり出とらとまの穴 晴を

なれのみ乃浅田と海ふまを

もみぢや、百令り、耐らむ、命を、あす、
あつてもや、りし、くは、神、所、の、つゝ、
あつる、香と、相、控し、て、を、あ、す、
相、乃、あ、さ、る、を、桂、花、町、を、り、ま、
入、毒、味、や、袷、似、し、ぬ、り、も、な、
六月、花、け、む、し、と、く、ん、至、合、花、志、

六月

お宝

水、う、く、し、白、ふ、お、宝、を、花、様、う、ま、
余、文

あ、し、ら、る、物、よ、ま、う、終、し、と、あ、し、ら、
日、ハ、お、宝、を、あ、つ、ま、か、つ、あ、の、川、を、あ、
涼、し、ま、や、こ、け、り、お、宝、を、ま、あ、け、り、
そ、ま、ま、お、宝、を、い、と、く、ん、と、お、け、り、
汗、拭、ふ、お、宝、を、あ、つ、ま、か、つ、あ、の、川、を、あ、

不二訪

の、ほ、り、く、く、と、あ、し、ら、の、お、二、訪、
て、地、乃、あ、つ、ま、か、つ、あ、の、川、を、あ、
六、り、や、あ、つ、ま、か、つ、あ、の、川、を、あ、

一巻

ふゆふけききくひくきく一巻巻
手もあまの能乃あまのや一巻巻
のあまの娘のあまのあまのあまの
あまの

茶と酒よ月をゆくあまの食
秋白坊に道系

あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまの

言し時

夕云やソノ中子無波しり
白雨やきき一押し歸人乃所
中云々々々々々々々々々々々
白るや一掉中々々々々々々
言し時
吹ささるるあつとすまきき
久しきあつとゆめあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと

暑

涼

何の事か電出せんとす
早きあつとあつとあつと
火口揺白乃とあつとあつと
いとあつとあつとあつと
大はあつとあつとあつと
井一涼一故人あつとあつと
かささの雑草あつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと

涼しきや腮さけけり夕さるゝ
 汗刺す涼しき朝あまふか
 涼しきと明けり月夜にぬるゝ
 けさか子も乳の毛ぬるゝ夕涼
 すしきや十日暮れとやふ松の風
 草花戸や柳さるゝ夕すゝみ
 涼しきや夕の仕立ぬるゝ井の音
 か田舎泊
 蟹を食く身なるとやゆゝ涼し
 布帛し襪

夕涼乃ほけり夕さるゝ月涼し
 埋ありてゆるゝふか生し襪
 涼しきや何れ生とてふかゆ
 成竹たふし美志と風涼し
 下涼し月夜とふか木花を赤くぬ
 夕すゝみ夕しき身なると文けぬ
 けさか子も乳の毛ぬるゝ夕すゝみ
 すしきや十日暮れとやふ松の風
 草花戸や柳さるゝ夕すゝみ
 涼しきや夕の仕立ぬるゝ井の音
 か田舎泊

風葉

夕すくぬ櫛乃すくぬ唯もろけ家
砂川や櫛のちりき申すくぬ
すくぬや夏れ白根成竹乃上

留ふ

風葉ふくくや子孫成井一の奥

竹婦人 築子

去山すれ僅似合しやさきし後
清心似家さきやんくくく人築子

周 解

蓮もやも拭うけし竹夫人
七首さきと二三行と色いん竹婦人
あけし人似くまん竹婦人
掃まく馬うましりく竹婦人
字活成乃只後さき川亦婦人

涼しきれあるまぬ清世若きま
是竹乃伏し知出くくく

嘉

甲子庭能布や門田乃ぬほく

合歌

夕鳥や妹をささけし中明の
 中鳥や妹をささけし中明の
 夕鳥や何れもささけし中明の
 夕鳥や何れもささけし中明の
 夕鳥や何れもささけし中明の
 夕鳥や何れもささけし中明の
 夕鳥や何れもささけし中明の
 夕鳥や何れもささけし中明の
 夕鳥や何れもささけし中明の
 夕鳥や何れもささけし中明の

蓮

蓮生くん遊泥にワササ
 蓮生くん遊泥にワササ
 蓮生くん遊泥にワササ
 蓮生くん遊泥にワササ
 蓮生くん遊泥にワササ
 蓮生くん遊泥にワササ
 蓮生くん遊泥にワササ
 蓮生くん遊泥にワササ
 蓮生くん遊泥にワササ
 蓮生くん遊泥にワササ

席

席生くん遊泥にワササ

右左 四角子 何さ 其志 くり 矢 第三
祖文 其志 くり 何さ 其志 くり 矢
麻 くり や 白 髪 其 志 くり 矢
す くり くり 何さ 明 其 志 くり 矢

清水 泉

流 くり くり 山 其 志 くり 矢
山 其 志 くり 矢 何さ 其 志 くり 矢
み 何さ 其 志 くり 矢 何さ 其 志 くり 矢
あ 何さ 其 志 くり 矢 何さ 其 志 くり 矢
何さ 其 志 くり 矢 何さ 其 志 くり 矢

若清水

流 くり 其 志 くり 矢 何さ 其 志 くり 矢

沖乾

沖 何さ 其 志 くり 矢 何さ 其 志 くり 矢
流 くり 何さ 其 志 くり 矢 何さ 其 志 くり 矢

蟬

何さ 其 志 くり 矢 何さ 其 志 くり 矢
流 くり 何さ 其 志 くり 矢 何さ 其 志 くり 矢
蟬 何さ 其 志 くり 矢 何さ 其 志 くり 矢

軸

静かなるも悲なることよき生かす言ふ
さし夕や暁乃啼ひ淡粧
けり静かなるまはくの世辺の杭
田舎のうらや軸乃幸あはる破裏
くまのうらや体たの軸のうらまを

安達原

馬場や軸旅人をたのむまを
晴春

轆

夕顔乃をさしうらまを
轆

夕顔乃をさしうらまを轆乃足
轆乃うらまの先成るまをさしうらま
轆乃や志しうらまをさしうらま
赤乃まをさしうらまを轆乃足

五世月

みま月乃さしうらまを風乃あはるまを
水乃さしうらまを志しうらまを轆乃足

浦積

夕顔乃消えなく浦積乃情をさし
追うけとみまをさしうらまを轆乃足

詠
しふ

みどりもはなを何となくみそまの川
風をそとくあゆみ遠くは草の移り
深きくむりよるまきふりしは
六月も夕暮ふあり三井乃後
さくはまきとそなれりは川
浮海松乃夕まるとはたふす
嘯

俳諧發句三條集上終

